

二次元ぷち文庫

エクソードハンター

レイ

大杉和馬  
表紙イラスト：あび

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『エクシードハンター レイ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



エクソードハンター

# レイ

大杉和馬  
表紙／あび

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

#### レイ

自らの身体能力と感覚を何倍にも高める異能力をもつ。歳は十代後半、裏世界ではレディバンサーの別名で恐れられる美少女。

#### ジェイド・グランシオ

レイが追っている巨漢の賞金首。地下コロシウムで霸王の座についており、対女闘士戦の時には観客を期待させてやまない。

ウオオオオオオオオオ——！！

長く響き渡る重低音の咆哮<sup>ほうこう</sup>。巨獣の唸りにも似たエクゾースト音が夜の闇を引き裂き、美しい流線型を描く黒のメタリックボディが、冷たい夜気をその全身で貫いていく。

1万ccを越える大排気量のエンジンが生み出す猛悪なパワーを、走るといふ一点に特化させたこのモンスターマシンが繰り出す速度はゆうに時速400kmを叩き出すのだ。正面から叩きつけてくる大気さえ鈍器のように乗り手を打ちのめし、僅<sup>わず</sup>かなハンドル操作のミスが即、冥府への片道切符に化ける。この非常識極まりない怪物を乗りこなしているライダーは、むしろ華奢<sup>さやしゃ</sup>にさえ見えた。

キヤイイイイ——ツツ！！

悲鳴のような甲高い音を奏で強制停車。車輪と道路が生み出す摩擦熱が白煙を噴き上げ、鼻を衝く異臭が周囲に立ち込める。慣性が生み出す圧倒的な反動をその小柄な身体で巧みにいなし、暴れ狂<sup>くるがね</sup>う鉄の驛馬を漆黒の海へと転落する間際で止めてみせた。

ドンドンドンドンドン……。

「……」

不満げに身体を揺らす巨獣の背に跨がり、そのライダーはフルフェイスのバイザーの奥から、無言で鋭い視線を海の方へと送る。暗い対岸に連なるいくつもの倉庫の影、そこにそのライダーの目指すものはあった。

「約束の金はここに用意したぜ……」

微弱な電灯に照らし出された薄暗い室内にドスの利いた低い声が響く。

どこからともなく聞こえる海鳥の鳴き声と汽笛の音、そして乱雑に積み上げられた金属のコンテナ。そこが海沿いにある倉庫の中であることが窺い知れる。

「ふむ、確かに……」

十人を越える一目で筋モノと知れる屈強な男達が見守る中、二人の男が頷きあつた。一人は僅かに肥満気味の男、その醜悪な顔に浮かぶ凶暴かつ狡猾な笑みが紛れもなく、周りの男達のリーダー格であることを物語っている。

さらにもう一人、こちらはまったく逆のタイプと言つていいだろう。その整った顔に浮かぶ柔らかな笑顔、人畜無害を絵に描いたような優男だ。だが、見る者が見れば、常に笑みの形に細められた灰緑色の瞳の奥にぎらつく欲望と酷薄な輝きに身を震わせることだろう。

ぎっしりと札束の詰め込まれたアタッシュケースが、テーブルの上に複数並べられているが、男達の視線はそちらを向いてはいない。

「そちらの希望の品……キマイラだ。ま、確認してくれや……」

プシュー……ッ。

太った男の指示でテーブルに置かれた小さなコンテナの電子錠が外され、圧縮空気の弾

ける音とともに重いケースの蓋が開かれる。その中には小さなアンプルが二十ほど並べられ、半透明な容器の内側で薄緑色の液体が不気味に輝いていた。

——<sup>ドラッグ</sup>麻薬……。

コカイン、LSD、マリファナ……etc.。旧世紀のころから人の心身を蝕むドラッグは時代を経ても、法の目をかいくぐり、今なお闇の世界を中心に疫病のように蔓延していた。それどころか技術や医療の発展が進むとともに、常習性も、危険性も加速度的に上昇し、それこそ身も心も、文字通り「人を棄てる」薬がいくつも生み出されてきた。

それでもそんな魔の薬の流通が消えることはない。狂気を招き、破滅を呼ぶ薬の誘惑を人は数世紀の発展と進化を経ても、振り払えないでいた。

「ま、お互い持ちつ持たれつ、これからも仲良くやっていこうや」  
下卑た笑みを浮かべる太った男の差し出した手を、優男が無表情に握り返す。商談成立、こうしてまた悪魔の薬が人の社会へとばら撒かれていく……はずだった。

ブオオオン、ブオオオオン!!

不意に倉庫内の静寂を引き裂く重い排気音、まるで猛獣が獲物を威嚇するかのような重低音が全員の腹の底を揺さぶった。ハツとしたように周囲の黒服の男達が身構え、ある者は懐に忍ばせた銃器へと素早く手を伸ばす。

バァアンツ!!

唐突に倉庫の入口を塞ぐ重い両開きの金属扉が叩き壊されんばかりに内側へと開かれた。入口から眩しく照らし出されるヘッドライトにその場の全員が目を細め、思わず手を上げて庇おうとする。だがそんな行動のなにより速く、その場に飛び込んだ一台のバイクがあった。

「な、なんだ……!? うおおっ!!」

「ぐああっ!!」

狭い倉庫内を縦横に駆け抜ける鉄の馬に、ある男は弾き飛ばされ、ある男は地面に引き倒される。銃を抜いて応戦しようとする者も居たが、巧みかつ素早いターンの連続に狙いも付けられず、次々とその後輪や前輪、車体に撥ね飛ばされていく。まさに瞬きをするほどの間に十人近くいた男は全て地を這い、ボス格であった優男と太った男の二人、そのそばで一人の大男が立っているだけとなった。

「な……な……な……?」

「……」

何が起こったのか咄嗟には理解できずに、呆然と呻くだけの男へと顔を向けた乱入者は、しかし、声を発しようともしない。

「お……女あ……?」



大男がくぐもった声で呟く。フルフェイスのヘルメットを被り、漆黒のレザージャンパーを身に纏まとってはいるが、その身体が描く美しく柔らかいラインは紛れもなく女性のものであった。

「ええ、そうですよ」

狼狽している男達と引き換えに、二人のボス格の一人、太った男にディラードと呼ばれた優男の態度は落ち着いたものだった。

「いやいや、よく来てくれましたねえ」

周囲の部下を全員なぎ倒され、焦るもう一人のボスに引き換え、軽薄な笑みをその顔に貼りつけた優男は、焦った風もなく乱入者へと声をかける。

「……」

女は、そんな男の態度に何の感慨も感じないのか。未だ唸りをあげるバイクに跨がったまま黒いバイザー越しに冷めた視線を男達へと送っていた。

「お、おい。ディラードの。そりや、いったいどういことだ？」

脂ぎった醜貌を焦りと疑惑に歪め、たつぷりと脂肪を溜め込んだ腹を揺すりながら傍らの男に怒鳴りつける。

「へ、まあいい。どんな小生意気な女か知らねえが、おい相手してやれ」

余裕を崩さないもう一人の男への対抗心でも生まれたのだらう。見るからに虚勢を絞り

出した男が、傍らの大男に声をかける。

「……へい」

ボスの言葉に頷きボキボキと指を鳴らしながら前に出る男の上背はゆうに2 m近いだろう。黒服を引き裂かんばかりに押し上げる筋肉、掛けたサングラスでも隠しきれない獰猛な笑みから、自分の力への絶対の自信が垣間見える。

「おイタが過ぎたな……どこの組織の鉄砲玉か知らねえが、女の身じゃ楽には死ねねえぜ？」

自分の護衛である大男の態度に、薄汚い我を取り戻したのか、太った男が舌舐めずりした。そうだ。不意を打たれて制圧されたがまだ自分にはこの護衛がいる。脳みそまで筋肉でできたような頭の悪い男だが、こういう荒事には向いている。

「……」

前に進み出る大男に、女ライダーも跨がっていたバイクを無言で降りる。近づく男と比べてみれば、その身長や体格の差はまさに大人と子供だ。女と男の差を差し引いても、腕づくで彼女がこの男をどうこうするのは無理に思われた。

気の強い女を泣き叫ばせ、屈服させる姿でも夢想しているのか、欲望に歪み<sup>よじ</sup>戻れた男の醜い笑顔はしかし、次の瞬間あつけないほど簡単に崩れ去った。

「な……!!」

小柄な女ごときその腕力で組み伏せようとしたのだろう。丸太のような両腕を伸ばした大男の両手首を、野花のように細く可憐な女の手が軽く掴んだ。そう思った瞬間だった。

「うがああああアツ!!」

メキメキメキメキツ!!

骨が軋む……いや、まるで砕けんばかりの音と同時に、巨漢の悲鳴が響き渡る。丸太に軽く添えられたようにしか見えない女の細腕が音の発生源だ。

「ぎいうああああ——っ!!」

異様な光景だった。2 m以上の大男が、自分の胸ほどもない背丈の女の手で悶絶し、ついには両膝をつきながら泣き叫んでいる。

そのまま女が両手を振ると、100 kgを遥かに超す巨漢の身体がまるで投げ捨てられた空き缶のように、無造作に積み重ねられたコンテナの山の向こうへと放り投げられた。

「な……な……な……」

響き渡る何かをなぎ倒すような音の方向に目を向ける者もいない。肥満男はあまりにも非常識極まる事実脳が停止でもしたのか、震える指で女を指さして言葉にならない声を漏らすのみ。

「やれやれ……ま、こんなものでしょうかねえ……?」

そんな取引相手を、優男はまるで道端に落ちた犬の糞でも眺めるような目つきで一瞥す

ると、右手を高々と振り上げた。

ザザザッ!!

それを合図としてコンテナの陰から、柱の陰や高い天井の梁の上から、軽く二十人を超える男達が銃を手に姿を現す。

向けられた黒光りする銃口、そのどれもが携帯用のハンドガンなどではない。毎分数百発を越す死の弾丸をばら撒くことを可能とする、軍用の突撃銃や小機関銃だ。

「なるほど……ね。今時、こんな古臭い取引方法を選んだのも、私を誘き出すためってわけ？」

それまで無言だった女が初めて言葉を紡ぐ。ヘルメット越しのくぐもった声、しかし、そこに怯えの色は微塵みじんも感じられない。

ファサツ……。

そのまま何の躊躇もなくヘルメットを脱ぎ去った。バツと輝くような黒が弾ける。狭いヘルメットの中に閉じ込められていた艶やかな黒髪が、流れるように細い肩口から滑り落ちた。

「それにしても私一人に、これだけの人数を揃えるなんてね……」

遮るものがなくなり、凜と涼やかに響く皮肉を宿した声。まるで吸い寄せられるように男達の視線が、女の素顔へと向けられた。

ゴクリ……ッ。

ライダースーツ越しでもその人物が女性であることは分かっていた男達だが、その瞬間誰もが小さく息を呑み、唾液を嚥下した。その下から現れたのが、まだ年若い……少女だったからということもある。だがそれだけではない。

バイザーに隠されていた、どこか猫を思わせる吊り気味の瞳は神秘的な紅色に輝き、細く高く整えられた鼻梁はツンと生意気に天を突いている。整った顔立ちを構成するスツキリと形良く尖った顎、そこから伸びる柔らかそうな頬が美麗な曲線を描いていた。

やや小さめの口を艶やかな桜色が彩り、鋭利に跳ねた細い眉毛、形良い耳はその長い髪の間から覗いている。彼女の容貌を飾る一個一個の部品は、見惚れるほどに精密でさらに絶妙なバランスのもと配置されていた。

「ほんと、少し大袈裟なんじゃない？」

そのしつとりと艶を帯びた唇を笑みの形に刻み、まるで挑発するように男達へと投げかける。そうするとそれまでの大人びた表情が崩れ、実は彼女がまだ少女の域を出ていないことに男達は気づかされた。

おそろくまだ十代後半くらいだろう。陶器を思わせる滑らかな肌は健康的な小麦色に日焼けしており、そのしなやかな肢体の内側にも溢れんばかりの生気が宿っているのが分かる。

どこから見ても特上級の美少女と言つていい、だが彼女を形作るのそんな見た目だけの美しさなどではなかった。

紅く輝く瞳は歪むことを知らない真つ直ぐな光を放ち、その内に鮮烈なほどに目映ゆく尊い意志の力を宿している。そして、その美貌を彩る不敵な笑みには屈することを良しとしない誇り高さと、揺るぎない自分への自信が漲つていた。

「いえいえ、まさか。貴方相手に歓迎の手を抜くことはできませんよ」

「お、おい！ な、なんだ？ あの姉ちゃんは？」

一人取り残された形になった太った男が、その二段腹を揺らしながらそのガマガエルのような醜貌で喚き散らした。そのくせ、その好色そうな視線はあれほどの力を見せたにも拘らず、美しい少女に釘付けになっている。

「呑気な方ですねえ。彼女には貴方の組織も散々煮え湯を飲まされたでしょう？」

「な、なんだと……!？」

呆れたような優男の言葉に、ギョツとしたように男が身を引いた。

「ま、ま、まさ……」

「ええ、彼女こそがレディパンサー……。まさに我らを狩る美しきハンターですよ」

聞いたことがある。ここ数年、自分達のような麻薬組織のみを狙って活動する賞金稼ぎバウンディハンターの重なることを……。億単位の薬の取引を妨害されたことなど数えきれず、いくつもの組織の重

鎮達がその賞金稼ぎの手に掛かり警察へと引き渡された。

その賞金稼ぎに狙われ逃げのびたものは少なく、それ故にその賞金稼ぎが女であること、狙われるのが麻薬組織の人間ばかりであることから、いつしか女豹レディバンサーという二つ名をもって裏世界の人間達を震撼させてきた。

そんな相手のことを歓迎するように両手を広げ、どこか陶醉した様子で語る優男を、まるで狂人でも見るかのような視線が敵味方問わず送られる。

自分達に破滅をもたらす使者をむしろ讃えるような言動を取るこの男は何を考えているのだろうか？ だがそんな空気を一見して不機嫌と分かる声が破った。

「ちよつとお、いい加減、その恥ずかしい呼び方はやめてくれない？ こっちは好きで呼ばれてるんじゃないんだから……」

少女は憤慨すると肩に掛かった黒髪を、乱暴に後ろへと払う。夜空に星屑を流したように煌めく漆黒の滝が細い背中へ勢いよく流れ落ち、その細い背中にパッと広がった。今なお無数の銃口を自身へと突きつけられているにも拘わらず、その澄ました美貌に怯えの色はない。むしろこの現状を楽しんでさえいるような雰囲気があった。

「ど、どういふつもりだ!? なんだって取引の場所にこんな危険な奴を……!!」

泡を食ったブ男が唾を飛ばさんばかりに優男に怒鳴りつける。取引相手の自分に内緒でこれだけの武器を持った男達を取引の場に忍ばせていたのだ。先ほどの少女との会話を聞

くまでもなく、この男が自分達をダシに使って彼女を誘き出したのは明らかだった。

「貴方は少し黙っていてください!!」

目さえ向けずに男の言葉を遮るディラードに男が気圧されたように押し黙る。その表情に先ほども浮かんでいた、どこか軽薄な笑みの影はない。

「今は私と、私の愛しいハニーが話しているところなんですよ」

秘せぬ欲望と異様な熱の籠った視線を少女へと送る。少女は背筋を毛虫が這いまわるような気味の悪さを覚え、その形良い眉をひそめた。

「ちよつと、誰が誰のハニーよ……?」

「もちろん貴方ですよ。私は貴方が欲しいのですよ。ねえ、レディパンサー。いえ、この呼び方は嫌なものでしたね。ではレイとお呼びしましょうか?」

舌舐めずりでもしそうな笑顔で本名を呼ばれ、少女の美貌が不快と屈辱の入り混じった怒りに歪む。おぞましいほどの自分に対する執着心とどす黒い情念、間違っても自分に掛けられた賞金を狙うバウンティハンターに向ける目ではない。

今回の件にしてもそうだ。大事な取引を相手にも黙って囮に使うような真似をするなど正気の沙汰ではなかった。下手をすれば金も、ドラッグも、信用も、いや自分の命さえ危険に曝すことになる。

「貴方……正気? 忘れたわけじゃないでしょ? 私が以前貴方を警察に引き渡したこと



を……」

数年前、当時まだ無名の自分が捕まえ、警察に引き渡したところのある男を呆れたような目で見つめる。莫大な保釈金を払って釈放されたようだが、一度下手を打ったこの男は組織から追放されたと聞いていた。

それから僅かな期間で再び自分で組織を立ち上げたときにも驚いたものだが、まさか再び、前以上の賞金が掛けられるなどとは思っていなかった。プライドの塊のようなこの男のことだ。自分に深い恨みを持っているだろうとは思っていたが、よもやこんな話を持ち出してくるとは……。

「ええ、もちろんですよ。私は貴方に打ちのめされ、そして気づいたのです。貴方こそ私の求めていた女神だと……」

瞳の奥で何かがぎらついているのが分かる。本気だ。正気かどうかは別としてこの男は心の底からそう思っている。思わず強気な賞金稼ぎの少女の背筋にも冷たいものが滑り落ちた。

「さ。マイ・スウィートハニー……いかに貴方でもこれだけの銃を前にしては諦めるしかないでしょう？ どうです、大人しく私のモノになりませんか？」

ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべたまま、猫なで声で語りかけてくる。優しげな、まるで子供でもあやしつけるような声色……。

ジャキツ!!

だがそんな甘い態度と声とは裏腹に、周囲からは銃を構える無骨な金属音がいくつも響く。脅しなどでは決してない、とレイは冷静に判断していた。

問答無用の最終通告、この裏社会の一角を担うこの男は決して甘くはない。これを断れば容赦なく千発は越える死の弾丸が自分へと撃ち込まれるだろう。たとえどんな人間だとして死角なく向けられた三十を超える銃口を前に、逃げることでできまい。

「斬新なプロポーズね。貴方は指輪じゃなくて相手に銃口を突きつけて求愛をするの？」  
「いやいや、お望みならどんな高級な指輪だって君のために用意してあげるよ……君が私のモノにさえなるならね？」

返答を要求するように銃口が光り、いくつもの撃鉄音が小さく響く。

「ふうん……ま、確かにいくら私でも、これだけの銃に囲まれちゃ、ちよつと逃げられないわね」

深く溜め息をつきながら、小さく首を振る。それを見てこの少女が自分のモノになる……優男が生唾を呑み込み、歓喜に身を震わせながら何か言葉を紡ごうとした時だった。

「でもお断りよ。貴方の愛人になるくらいなら死んだ方がまし。一昨日来なさい。この豚野郎♪」

「は……？」

にっこりと花も恥じらう可憐な微笑みを浮かべ、桜の花びらのような艶やかな唇から、思わず目を剥くような罵詈雑言が紡ぎ出される。一瞬、優男は何を言われたのか理解できずに、笑みを浮かべたまま呆けてしまう。

「聞こえなかつたの、何ならサービスを込めてもつとわかりやすい形で言つてあげた方がいいかしら？ 死んでもお断りよ」

何を言われたか理解できないといった様子の優男に、慈愛に満ちた笑みを向けながらこれ以上ないほど残酷な言葉を突き返す。この誇り高い少女は、自身の心や魂を、自分の命がチップだとしても相手に売り渡す気などはなかつた。

「そ、そうですか……いやいや残念ですね……本当に……気は変わりませんか？」

「あら、残念ね。私、前言を撤回したことだけはないの」

にっこりとした笑みを向けられ、男はぴくぴくと頬を引き攣らせ、常に浮かべていた気障つたらしい笑みが醜く歪む。瞳の中で酷薄な光が輝きを増し、憎悪にも似た感情がその奥から噴き出した。

「では、お名残惜しいのですがここで永遠のお別れです」

何の合図もなかつた。男がそう呟いたのを皮切りに迸る目映ゆいばかりのマズルフラッシュ、噴き上がる白い硝煙、耳を劈くような銃声とともに夥しい数の弾丸が一人の少女に向けてばら撒かれる。

ダダダダッダッダッダッ!! バラバラバラバラッ!!

レイの細身の身体に吸い込まれていくいくつもの銃弾。彼女の身体が玩具のように幾度も跳ね上がり、黒いレザーのライダースーツが破片となつて周囲に飛び散る。

だがそんな無残な光景も長くは続かなかつた。レイのそばのバイクにまでいくつもの弾丸が命中し、その何発かがガソリントankを撃ち抜いたのだ。

ドン!!

そばにいた自分の主人まで巻き込んで爆発する鉄の馬、紅蓮の炎が少女賞金稼ぎの総身を飲み込み姿を隠す。だがそれでも機銃の斉射は止まらなかつた。まるでそんな爆発などなかつたかのように、炎の中の影めがけて吐き出される無数の弾丸。

「お、おい……」

取引相手の男が、その出っ張った腹を震わせながらディラードに思わず声をかける。どう見てもあの女はもう死んでいる。狂気じみた過剰殺戮に犯罪組織の一員である男さえ、恐怖を覚えていた。

ディラードの狂喜に歪んだ顔が燃え盛る炎に照らし出され、何人もの荒くれ者を顎で使つてきた男が、思わず一步後ろに下がってしまう。

「ああ、そうそう……忘れていましたね」

片腕を上げると同時に、まるでオーケストラの終幕のようにピタリと銃声がやむ。静寂

の中で薬莖が床を打つ甲高い音がいくつも奏でられ、炎が燃え、何かが爆ぜる音が響いた。「貴方の始末を……」

無造作に突き出した拳銃、先ほどまで少女に向けられた火器と比べれば悲しいくらい貧弱な銃器だが、本来一人の命を奪うにはそれで十分事足りるのだ。

「な……お、お前……何……？」

「取引中に、レディパンサーの急襲を受けて我々以外全滅、そういう筋書きなのですよ。信用が大事な商売ですから……」

取引先の相手を自分の目的のために嵌め、取引自体を囮にしたなどと知られたら困りますので……。男は一片の罪悪感もなくそう言つてのける。

「ふ、ふふふざけ……」

パンツ!!

妙に小さい音をたてて太った男はなにも言えなくなつた。その醜い顔の額の中央にぽつりと空いた穴からは驚くほど少ない量の血しか流れず。それでも男の命を奪うには十分過ぎた。

「やれやれ……ここまで準備したのに無駄足でしたか……」

「ほんと……最低ね。貴方」

男のお気に入りの玩具でもなくしてしまつたような口調に答えるはずもない声が応じた。

しかも、炎を噴き上げるバイクの残骸の中から……。

「な……っ!!」

その場の全員が驚愕きょうがくの声をあげて炎の中へと目を向ける。有り得るはずがなかった。あれだけの弾丸を受け、そしてあの爆発に巻き込まれてなお彼女が生きているなど。たとえ、最新式の防弾スーツを身につけていたとしてもあれだけの数の軍用銃の弾幕を受けては一溜まりもないはず、なにより剥き出しの顔にでも弾丸があたれば……。

「ば、馬鹿な……」

だが、ゆっくりと炎の中から人影が歩み出てくるのを見て思わず、その場の全員が申し合わせたように半歩後ずさった。

ブワリ……。

背後からの炎に煽られて漆黒の髪が宙を舞う。炎の中にいたというのに焦げも火傷痕やけどもない真っ直ぐな髪も、その美貌もどこも変わっていないかった。だが、彼女が身に纏まとっているのは先ほどまでの漆黒のライダースーツではない。

「そ、その姿は……」

真っ先に目を引いたのは鮮やかな紅のレオタードだった。その肌**に**ぴったりとフィットした極薄の布地が少女の年齢に合あわぬ大人びた身体しんたいの線を露あらわわにし、その非常識な光景を一瞬忘れさせる。

全体的にほっそりとし、無駄な贅肉など欠片もない肢体。だが、薄い布地を押し上げる豊かな双峰は柔美かつ弾力に溢れた見事極まるラインを維持し、その引き締まった腹部との落差が魅せる乳線美などまさに絶品の一言だ。

その細い腰から肉感的な臀部まで、これでもかというほど扇情的なくびれが描き出され、薄手の繊維がびっちりとその官能的なボディラインに張りつく様は下手な全裸よりも男の劣情を煽る。

「あゝあ、あのバイク高かったのに……」

まるでなにもなかったかのように肩の埃を払う姿に誰も声を発することができない。不思議なことに紅蓮の炎に焦げ目さえつかず、むしろ炎がその身を護っているような錯覚さえ覚える。

レオタードの下に羽織った青色のアンダーシャツの袖口を熱風が煽り、そこから覗く健康的な二の腕から芸術品のように細い指先まで輝くような素肌を曝していた。

きわどいVラインからすらりと長く伸びる両脚は、そのしなやかな脚線を薄い紫色のタイツで彩っている。膝から下は柔らかそうなローズピンクのレッグウォーマーが護り、レオタードと同色の真紅のトゥシューズが細い爪先までを覆っていた。

美しい少女のレオタード姿に誰もが見惚れ、同時にそれ以上の戦慄をもって出迎える。恐ろしいほどに似合っているその姿が、この場面には信じられないほどそぐわない。硝煙

とガソリンと、何かが焼ける異臭漂う死の空間に、舞い立つ美しき女神……。

「ど、どうして……？」

からからの口を無理矢理粘つく唾液で湿らせ、喉に張りつく舌を動かして言葉を紡ぐ。恐ろしい。これほど美しい少女が、賞金首達の間でレディパンサーと呼ばれた本当の理由が今分かった。

この少女が纏う美の真実は、花のようなただ可憐でたおやかなものではない。野生の獣が持つしなやかで奔放な輝き、それも大人しい草食動物のそれではなく。猛獣や猛禽の類が持つ、己の牙と爪で生き抜いてきた強さと猛々しさが放つ美しさなのだ。

「さあ……？　でも、まあ弾丸のお礼はたっぷりさせてもらうわよ？」

ゆらりとレイの身体から何かが立ち上る。ようやく気がついた。彼女の髪も素肌も何か薄い光の膜のようなモノで覆われていることに、無数の弾丸を跳ね返し、炎さえ弾いてみせたその力の正体によく気づく。

「異能力者……」

ディラードはその言葉を最後に強い衝撃を受けて気を失った。

ファオン!!　ファオン!!　ファオン!!

一つの倉庫を幾重にも包囲する警察車輦が奏でるサイレンの音と回転灯ランブの光がいくつも



交差している。何人もの制服警官や私服の刑事がパトカーの陰から拳銃やライフルを構え、物々しくその倉庫を包圍していた。

内側に向けてはね開けられた金属の両開きの扉、その内側に残らずその銃口は向けられていた。だが、誰も中に踏み込もうとはしない。ただ異様な緊張感だけが支配する空気の中、扉の奥の暗がりからゆっくりと何者かがライトの下へと歩み出てきた。

拳銃を向けようとする警官達を、一人の年配の刑事が手を上げて制する。一瞬遅れて、一人の男をまるで荷物のように肩に担いだ少女がライトに照らし出された。

「あら、随分大勢できたのね。お出迎え御苦労さま……」

鮮やかなレオタードにその身を包んだ美少女、しかも、この大捕り物の目的である主犯を捕らえての登場である。しかし周囲の警官達は、そんな立役者の登場を歓迎した様子はなく、むしろ忌々しそうに舌打ちさえする。露骨な怒りや嫌悪さえ向ける者もいた。

「はい、それじゃ、コイツは引き渡すから賞金はちゃんと私の口座に振り込んでおいてね？」

そんな感情を向けられている少女の方はといえば、警官達の視線や態度など歯牙にもかけないのか、その場の指揮官の前まで歩み寄ると肩に担いでいた気絶した男、ディラードをゴミでも放り捨てるように受け渡す。

バウンティハンター……などと言えば聞こえはいいが、警官の立場からすれば警察の手

柄を横からかつさらっていく忌々しい邪魔ものにすぎない。賞金首に懸けられる賞金もまた税金から支払われるのだ。同じ税金で働く警察からすれば彼女達が活躍すればするほど、市民からは税金泥棒呼ばわりされることになるのだ。

まして彼女は異能力者、旧世紀には超能力と呼ばれたその力は、すでに科学的に解明されて久しい。それでも、普通の人が不可思議なその能力を恐れ、嫌い、忌避する風潮は簡単に消えはしなかった。

「ふん……」

変わらず見惚れるような微笑の内に侮蔑と嘲弄の色を織り交ぜ、軽く鼻を鳴らす。レイからすればそんな警察の態度など情弱の一言に尽きた。他人に手柄を取られるのが嫌ならば、自分で手柄を立てればいい。

自分の怠惰と無能を、他人の嫉妬へ転嫁するような輩の面子など気にしてやる価値もなかった。颯爽と肩で風を切って歩き去ろうとする。

「お、おい、レイ……大丈夫なのか？ どこか怪我はないか？」

そんな中、先ほど警官達の発砲を制止した刑事が少女の元へと駆け寄り、慌てたように言葉をかけてきた。そう古くもないのにやたらくたびれたコートに、ろくに手入れもしていないなさそうなスーツ。三十代も前半だろうか？ いかにも現場上がりといった感じの自信と貫録を感じさせる刑事だった。

「何よ……バード、来てたの？」

自分を案ずる刑事にまるでそっけなく返事をするレイ。だがその一瞬、少女の笑みから侮蔑と挑発の毒が消え、その笑顔が少女が片手で数えるほどしかない人へと向ける、彼女本来の素顔になったことに本人さえも気づかない。

「来てたの……じゃない!! お前がディラーダのドラッグの取引に乗り込むと連絡を聞いた時には、本気で胆を潰したんだぞ!!」

グレーの瞳を怒りに染め、怒鳴りつけてくる男をレイはわざとらしく耳を塞いでそっぽを向く。この説教癖さえなければいい奴なのに……。だが、少女にも分かつていた。その厳しい怒鳴り声の内に紛れもなく少女を心配する想いと、無事だったという安堵の喜びが宿っている。

「も、もう、うるさいわね。いいじゃない、こうして無事だったんだから……」

「いいわけないだろ!! 大体お前は、こんな危険な仕事なんてせずに……!!」

延々と続く刑事の説教に思わず口を突いて出てくるのは、小生意気な憎まれ口だ。少女は、頬を膨らませて明後日の方をツンと向いている。先ほどとは打って変わって年相応の少女の姿に、あの猛獣を思わせる賞金稼ぎの影はない。

「まったく!! 顔を合わせればバードは説教ばかりなんだから」

敵対する者、害意を向けるものには容赦なく冷徹になれる反面、レイは自分に対して下

心のない好意を向けてくれる者に対しては、強く出ることがなかった。年の離れた兄か下手をすれば父親のように自分の身を案じてくれるこの刑事を、レイは邪険に接しながらも決して嫌ってはいない。

(少しは手柄立てさせてあげようかと思つたのに……)

ぶつぶつと心の中で文句を言う少女。わざわざこの取引に乗り込むことを刑事に告げたのも、ドラッグやその取り巻き連中達の手柄を引き渡せば、その熱意と努力に反して万年平刑事のこの男にも少しは報いるものがあると思つたからだ。

無論、そんなことはこの素直ではない少女が、間違つても言うはずはないのだが……。

「待て……レイ!!」

「……何よ?」

肩を怒らせ、その場を立ち去ろうとする少女を刑事が呼びとめる。不機嫌そうな顔を隠そうとせずついに振り向こうとした彼女の肩にふわりと何か暖かいものが掛けられた。

染み込んだ汗の臭いが微かに鼻を衝き、お世辞にも上等と言える生地ではない安物のコートは、細身の彼女の身体には随分と大きい。刑事の方を呆気にとられたように見つめる少女に、男は不機嫌そうな顔を隠そうとせずついに言葉を続ける。

「そんな恰好じゃ風邪ひくぞ」

「いや、あのね……バード……」

このレオタードはレイの異能力エクスシードを増幅し、軍用ライフルや炎さえ弾き返す特殊戦闘服だ。当然ながら夜風程度の寒気を弾くなどわけもない。

「それに嫁入り前の女の子がむやみに肌を曝すものじゃない」

「いったい、いつの時代の人間よ。貴方は……はあ、もういいわ……」

堅物の言葉に呆れたように全身の力を抜くレイ。だが呆れた言葉と裏腹に、少女は思わずにやけそうになる頬を引き締めるのに失敗し、慌てて背を向けるとさっさと歩き出す。さらりとした黒髪が風に乗って軽く流れ、無骨なコートの裾から覗くしなやかな脚が逆に色っぽい。

「まったく……ばあくか……」

ギョツとコートの胸元を掻き合わせ、バードの温もりと男臭い香りを全身で感じながら、自分自身にようやく聞こえる程度の小さな呟き。そこに宿っている暖かな感情に自分自身戸惑い、それでも満足しながら夜の街を歩いていった。

ワアアアアアア——ッ!!

古代ローマのコロシウムを思わせる円形の闘技場に凄まじい歓声が沸き起こる。割れんばかりの拍手と轟音と言っているほどの叫び声、異様なほどの熱気がその中央に向けて押し寄せた。

『ごらんください皆様。可憐に染まった桜色の顔、荒く乱れた息、強気を装つてもレイはお尻を触られまくって感じてしまっているようです!!』

それを煽るように流されるアナウンスにさらに歓声が大きくなった。  
(く……好き勝手言ってくれて……見てなさい。このままじゃ終わらないんだから……)

屈辱に身を震わせ、それでも強気の視線を向ける女賞金稼ぎ。しかし、そんな姿は観客達のさらなる嗜虐性と興奮を煽り、広いドームの中に熱気が一気に渦巻いていく。

「ほおらほおら、お客様にそんな目を向けちゃいけないだろお？ そんないけない子にはおしおきだね」

背後から聞こえる男の声だが、その発生源がどこか悟りレイはギョツとなったように視線を上に向けた。大きくVの字に開かれたしなやかな両脚の間から、下を覗き込むように男の顔が自分を見下ろしている。そう、レイの股間に触れそうなほどの近くに男の顔があった。

「な、ど、どこから覗いて……み、見るな……このスケベ!! 変態!!」

慌てて脚を閉じようとすが足首を拘束する触手の力は強く、さらに両膝にまで別の触手が巻きついては脚も膝も閉じられない。レオタードの布地越しに男の荒い鼻息がアソコにあたる。まるで刺すような視線が自分の恥ずかしい場所にレオタードの上から注がれているのが分かった。

「く……う……っ」

耐えきれない羞恥の連続に、桜色の唇の端から呻き声が漏れる。見られている……いくら衣服の上からとはいえ、自分の最も秘すべき場所をこんな下衆な男に見られてしまっている。それがあまりにも悔しく、恥ずかしい。だが少女が受けている恥辱の責めは、まだまだそんな生易しいものではなかった。

「へへへ……濡れてるぜ。レイちゃん……」

ビクッ!! 囁かれた悪魔の言葉に、レイの全身が大きく震える。一瞬、何を言われたのか理解できなかつた。潤んだ真紅の瞳がきよとんとしたように男のいやらしい笑顔を見上げ、次の瞬間、激しい怒りと動揺に耳まで真っ赤になった少女の姿があつた。

男の視線が注がれている紅の布地の上にうつすらと浮かぶ濃い赤の染み、そこから香り立つ甘やかな芳香、先ほどの執拗な尻責めに少女の心はともかく、肉体の方は徐々に屈し始めた証拠だつた。

「ちよ……っ」

おおおおおおおおおお——っ!!

なにか文句を言おうとしたレイの叫びを遮つて先ほどに倍する大ききさで響き渡る歓声と、それを煽りたてる卑猥なアナウンスが男とレイへと向けて降り注ぐ。

「そ、そんな……嘘よ。だ、誰が……濡れてなんか……」

「う〜ん、いい匂いだ。甘酸っぱくて……ふふふ、嬉しいぜ、俺の責めに感じてくれてよ」  
 動揺し、再び暴れ出す少女を気にした風もなく男はわざと強く鼻を鳴らす。アソコの臭いまで嗅がれていることを強調され、羞恥の限界に泣き叫びたくなった。だが、彼女の強い矜持きんじつと意地がそんな弱気な姿を曝すことを良しとしない。

奥歯がギリギリと噛みしめられ、後ろ手に握られた拳に白くなるほど力が込められる。何を言ってもこの男や観客達を喜ばせるだけだ。ならば黙って逆転の機を窺うしかない。だが、そんな少女の悲壮な決意を嘲笑うように何かがレイの股間にあてがわれた。

ペロリ……っ。

「ふうあああっ!!」

びくりと大きく背中を反らせて甲高い悲鳴をあげる。まるで雷撃が腰の奥に炸裂したような衝撃に、触手が巻きついた細い脚が弾かれるように震え、宙に流れる髪が弾けるようにパツと広く舞った。

「ちよっ……なっ……あ、ひいあああ——っ!」

ビクリ……ビクン……ビクンッ!!

男の舌、Vゾーンの赤い染みの部分にあてられた赤黒い肉塊。それが布の上からレイの秘裂に沿うようにゆっくりと動いている。それだけなのにレイの全身が雷電に撃たれたように激しく震え、子宮を直接舐め上げられているような夥しい悦楽が神経を焼き焦がす。



「敏感な子だな。ホント……開発しがいのある身体だ」

レイの鋭敏な反応に気を良くした男はニヤニヤと笑いながら舌の動きを大きく、そして早くしてゆく。尻ばかりに加えられていた愛撫が初めてそこで炸裂する衝撃は、レイの想像を遥かに超えて鮮烈で苛烈で、新鮮だった。

くちゅッ!! くちゅッ!! ちゆるるッ!!!

「あっ……ふあっ……そ、そんな……い、いやっ……な、なんなのよ……こ、これええっ!!」

レオタードの上から舌が舐め上げ、舐め降ろす。それだけだ。たったそれだけの行為に頭が、背筋が震える。自分の身体が知らない内にここまで出来上がっていたなど、レイは想像もしていなかった。緩やかな尻への愛撫に慣らされる内に、その肉体はここまで快楽に飢えていたのだろうか？

脛の裏で白いフラッシュが幾度も焚かれ、背中を金色の稲光が幾度も走り抜けていく。背筋が徐々に美しいカーブを描いていき、強張った両脚が背伸びするように伸びあがる。屈辱だった。こんな男の責めに快感を覚え始めている自分が、ともすれば甘い鳴き声をあげてしまいたいようになる自分が悔しかった。

「へへへ……甘い蜜だぜえ。けどさ、意外だぜ。レイちゃんよ、あんた処女だな？」

「っ……、な、何を言っ……!!」

両手は頭の上で組まされ、まるで和式の便所に腰を下ろしたような姿勢で座ったままの中年の男と正面から向きあう。身体中に絡む触手は中途半端に少女の身体を支え、不自然な中腰の姿勢を少女へと強要させた。

「ひひひひ、頑張らないとこのまま腰が落ちるとレイちゃんの初貫通だぜ？ ほおらほおら腰に力を入れて脚を踏ん張らないとねえ」

「そ、そんな……こんなの無理に決まって……あひやつ、や、やめ……揺らさない……ひあいあああ!!」

腰に、足首に、両手に巻きつく触手がゆらゆらとレイの身体を揺する。そのたびに敏感な粘膜を灼熱の肉槍が擦り上げ、入口をこじ開けようと小突きまくる。柔らかくほぐれた入口が異物を拒みきれずに徐々に内側へと侵入を許し、そこから溢れ返る愛液が赤黒い肉棒を伝い落ちていった。

腰が砕けそうな悦楽が何度も粘膜の奥を直撃し肉棒を濡らす液体がさらに勢いを増す、辛うじて肉体を支える両脚は瘡おこりがかかったようにガクガクと震え、今にもその役目を放棄しそうだ。

「ふふふふ……どうしたどうした？ 私の剛直を素直に受け入れるのか？ ほおれほおれ」

中年紳士もまたゆつくりと腰を動かし、入口付近を亀頭の部分で刺激する。レイが思わ

ず喘ぎ、胸が反りかえると。溶かされたレオタードから覗く白い肌の上をゆつくりと男の唇が這う。

「くはっ……最低よ……貴方達は……狂って……ふあああつ、さ、触らないで!!」

必死に身をかかわそうとするが、未だ触手に拘束された身体は思うように動けず、その穢れを知らない肌の上に口づけの跡、恥辱の征服の証が刻まれていく。舌が這った後に唾液がテラテラと筋を残していき、気持ち悪いはずなのに神経をビリビリと刺激する搔痒感が走った。

自分の中を埋め尽くす肉を催促するように膣口が蠢動し、ラヴィアが吸いつくように男根に絡みつく。何を我慢することがある。男を受け入れて楽になれ、快楽に身を委ねてしまえばいい。そんな暗い誘惑の声が心の内から湧き上がる。

「やめっ……ふうああ。そんな……くうああああ、私の中から……出て……いけえ!! あいんんんっ!!」

ガクンとまた腰が大きく落ち、胎内を穿たれる痛みと快感に身体がひと際強く震えた。レイの中をゆつくりと割って入る熱く硬い肉塊が敏感な粘膜を掻きわけていく感触に汚されてしまう恐怖が一気に押し寄せてくる。

(いや、いやよ……こんな形で初めて……こんな奴に奪われるなんて……でも……でももう力が……脚に……入らな……)

ガクガクと生まれたばかりの仔鹿のように脚は震え、これ以上自分の体重さえ支えることができそうにない。イヤなのに……絶対いやなのに……、もう何もかも諦めて受け入れてしまいたい。徐々に……徐々に……少女の心と身体が男を受け入れていく。

グツと、ついに何かにあたったように男根の侵入がそこで止まる。潤い、ほぐれた秘肉の内で、未だに固く閉ざされた純潔の扉。レイを少女へと留める最後の境界に、ついに汚らわしい男の欲望の塊が触れたのだ。

「ここが、君の純潔の証。そう君が処女でいられる時間ももう僅かというわけだね。そおら」  
「ひああつ、やつ、動かさないでええ……駄目……だめつ……ダメえええ!!」

舌舐めずりをしながらわざとレイの腰を支えて亀頭の先端で処女膜を小突く。焦らすように、まるでレイの処女の最期を堪能するかのようにゆつくりと腰を回した。

熱く爛れただきつた膣肉が肉棒の先で捏ね回され、処女の扉がノックを繰り返される。牝の胎内の構造を熟知した肉棒が、丁寧に膣肉の中を探るたびに、腰の奥では電撃のように熱く鋭い快楽が駆け回った。亀頭の先端が膣口から幾度も出入りを繰り返す、そのたびに白く泡立つ愛液が中から掻き出されてくる。

「はあ……はあ……堪らない感触だな。もういいだろう」

脳髄を快楽で半分焼き切られながらも抵抗の意志を曲げない少女に業を煮やしたのか、レイの細い背中に腕を回し、正面からその胸の中に抱きすくめた。同時に少女の両腕を拘

束していた触手が離され、拳を作る力もない手が両脇に垂れ下がる。

「もらうぞ……お前の初めてを……」

男の鼻息が荒い。なにも知らない少女の、しかもあの裏社会にその名を轟かせる賞金稼ぎ。あのレディパンサーの純潔を自分が奪い去るといふ興奮と征服感に酔っている。身体を支える力さええない細い身体が男の胸がもたれかかった。

「ん……く……」

耳朶に唇が寄せられ囁かれても痛みと快楽に抗うのにいっぱいいっぱいでもろくに反応さえ返せない。触れあう肌の面積が一気に増し、柔らかな白桃が男の胸板に押しつけられて歪んだ。

グッ……。

「あ……」

小さな悲鳴。レイの白い喉が反らされ、後頭部から漆黒の滝が背後に向かって勢いよく流れる。メキメキと音さえ聞こえそうなほど強引にこじ開けられていく最後の扉、門が無残にへし折られ、蝶番が弾け飛んだ。

「あ……ぐっ……っ……い、痛……い、やあっ……」

体重が肉棒の一点にかかり、まるで身を引き裂かれるような痛苦に、見開かれた赤眼に焦点と輝きが戻り、歯を食いしばった唇から苦鳴の呻きが漏れた。

「う……ぐ……あつ、あつ、ああつ……」

逃れようとするレイの身体はきつく抱き止められ、さらに繋がりを深めようと無情の肉杭を打ち込んでいく。無意識に男の背に回された細い手がその醜い肌の上に形良い爪を立てた。

「さて、レイの初物いただきます♪」

ズン!!

「あ、つぐあ、ああああああああああああああアあ~~~~つっ!!」

男のふざけた宣言と同時にレイは高らかに絶叫し、弾丸で撃ち抜かれた小鹿のようにひと際大きく跳ねる。強固な処女の扉が打ち碎かれ、その奥の穢れなき聖地に男の欲望の肉塊を受け入れ……ついに、レイは純潔を失った。

「くっ……あつ……ぎっ……」

爪を立てた指が震える。男の背中に刻まされた屈辱の赤い筋。興奮と歓喜に痙攣する男の尻を間に挟んだ両脚が小刻みに痙攣する。ジンジンと焼けつくような痛みが下腹部から絶え間なく脳を焼き、まるで焼け溶けた鉄棒を差し込まれたような灼熱の異物感に息が勝手に肺の奥から吐き出される。

根元まで埋め込まれ陰囊いんのうと密着した秘丘から零れた少女の破瓜の証が、男の汚らわしい陰毛や腹の上にもまで滴り落ちる。

「わたし……わたしは……」

幾多の戦闘で味わったことのある激痛とは種を異にする痛み。肉体だけではない。女性の本能があげる断末の悲痛がレイに知らず涙を流させていた。どんな敵の前でも、どんなに傷ついても涙は見せたことがない女戦士が流す敗北と屈辱の証だった。

「おめでとう。レイ」

「あぐうっ」

男の僅かな身じろぎさえ貫かれたままの身体は再び激痛を呼び起こし、堪らず喉を反らすレイの苦痛に歪む美貌を見下ろし男は満足げに喉を鳴らした。

「これで、君は『女』になったというわけだな……この私のモノで……な？」

「はっ……はっ……くっ……」

男の腹の上に無残に散る真紅の花びら。醜い肉棒に絡むレイの破瓜の証。男の言葉に悔しさが溢れてくる。気丈な少女の怒りよりも悲しみが、痛みよりも悔しさが、男のにやつく笑みから逃げるように紅潮した顔を背けさせた。

「ははは、これは堪らん。あのレディパンサーの処女を、初物をこの私がいただいたのだ」  
 男の言葉の一つ一つが少女の心を無残に切り裂き、蹂躪していく。誇りは汚辱に塗れ、  
 潔癖な精神が屈辱に軋みをあげた。

ズン!!

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**